

親密すぎるうちあけ話

2006(平成18)年6月16日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督＝パトリス・ルコント／出演＝サンドリーヌ・ボネール／ファブリス・ルキーニ／ミシェル・デュショソワ／アンヌ・プロシエ／ジルベール・メルキ（ワイズポリシー配給／2004年フランス映画／104分）

……精神分析医を訪れたはずの美しい人妻の勘違いから、彼女の話聞いてしまった税理士。そこから始まった不思議な男と女の物語は、ある意味で危険がいっぱい。しかし、刺激的なセリフと官能的な「想像」が広がりながら、くり返されていく出会いは実にオシャレ。そして、その行く末に興味シンシン……？ もっとも、結果オーライだったからよかったものの、くれぐれもこんな「出会い」に期待して、大火傷することのないように……？

思いつきのすばらしさ、精神分析医 VS 税理士……

この映画にはすばらしい点がたくさんあるが、その第1は思いつきのすばらしさ。ちょっとした勘違いから物語が始まっていくというのは、映画によくある手法だが、この映画が面白いのは、勘違いされたのが精神分析医 VS 税理士だという点。

映画の冒頭に映るのは、コツコツと音をたてながら足早に歩いていく女アンナ（サンドリーヌ・ボネール）の足。あるアパートに入ってしまった彼女が、エレベーターに乗って目指したのは、6階の精神分析医モニエ医師（ミシェル・デュショソワ）の診察室。

ところが、先客と入れ替わるように彼女を迎えたのは、税理士のウィリアム（ファブリス・ルキーニ）。不審を抱きながら彼女を部屋の中に招き入れたウィリアムだったが、そこで彼女が語りはじめたのは、税務相談ではなく、夫婦生活の悩み。さて、これは……？

緊張感いっぱいの2人芝居の面白さ……

この映画には、ウィリアムにお客を取られた(?)精神分析医のモニエ医師が、ウィリアムにカウンセリングをするシーン(?)が数回登場するから、モニエ医師の役割も結構大きいものがある。また、ウィリアムの離婚した元妻(?)ジャンヌ(アンヌ・ブロシェ)とアンナの現在の夫マルク(ジルベール・メルキ)も登場し、それなりの役割を演ずることになる。

しかし、この3人は、すべてこの映画のストーリー構成にアクセントをつけるためだけの存在と位置づけられており、それ以上にでしゃばることは決してない。したがって、この映画は事実上「2人芝居」と言ってもいいほど、ウィリアムとアンナの「会話」と「演技」がすべて。

ウィリアムを精神分析医と「誤解」したうえでのアンナの「親密すぎるうちあけ話」は、2回だけで打ち切られることになる。それは、ウィリアムは今度こそ、自分は精神分析医ではないと言わなければならないと決心したことと、他方で、アンナはモニエ医師に電話をしたことによって、人違いだったことを思い知らされたため。

すると、3回目の「カウンセリング」は……? そこでケンカ別れ……? それとも、4回目以降も続くの……? そして続くとしたら、今度は一体何のカウンセリングに……? また、それは一体何のため……?

こんなウィリアムとアンナによる密室内での2人芝居は、2人のすばらしい演技力もあって緊張感がいっぱい。まるで心理サスペンス、パトリス・ルコント監督の言葉を借りれば、「感情ミステリーとでも言えるジャンル」の物語の展開に、グイグイと引き込まれていくこと請け合い……。

2度もカウンセリングを受けたのはなぜ……?

「夫とうまくいかない……」と一方的に話し始め、イラつくようにタバコに火をつけるアンナという女性は、最初からどこか精神的に不安定そう。したがって、美人なのだろうが、ちょっと危うそうな雰囲気がいっぱい。こんな女の話を書くコツは、あまり話を遮らずかつ反論せず、ただひたすら話を聞いてやること。弁

護士生活32年目を迎えた私はそのコツをよく知っている(?)が、このウィリアム税理士がそういう職業意識を持ってアンナの話をもっと聞いていたのかどうかは、かなり疑問……?

「私は税理士であって精神分析医ではない」と言い出すタイミングが掴みにくかったというのが、ウィリアムがジャンヌに語っている「弁解」。しかし、どうもそればかりではないと私は感じたし、多分それは多くの観客の目も同じはず……。すると、ウィリアムがついつい2度にわたって、アンナのカウンセリング(?)を引き受けたのはなぜ……?

「偽装」がバレた時の怒りの言葉はフランス流……?

ウィリアムが精神分析医でないことがわかったアンナがウィリアムに対して述べた怒りの言葉は、何とも文学的……? それは「謎の人物に秘密を知られたなんて、レイプされたみたい!」というもので、この文句のつけ方はアメリカ人や日本人には無理な、洗練されたフランス流……?

弁護士の私はすぐに「この場合は慰謝料の請求ができるかどうか?」などと考えてしまうし、ついつい『行列のできる法律相談所』のネタになるななどと考えてしまうが、それは弁護士の「カン繰り」というもので、アンナにはそんなつもりは全くなかったよう。

現実はその逆で、怒りに震えながら事務所を後にしたアンナは、なぜか数日後、再びウィリアムの事務所を訪れ、自分の名前を明らかにしたうえで、次の「カウンセリング」の予約を自ら取り付けることに……。

ホントorウソ? 挑発? 駆け引き? 女との会話は難しい……

ウィリアムの事務所には1人の女性秘書(というよりおばちゃん)がいるが、これは受付だけ。したがって、ウィリアムが密室の中でのカウンセリングを重ねていく中、2人の間には打ちとけた雰囲気は漂いはじめたうえ、「うちあけ話」の内容も次第に夫とのセックス絡みの話になっていった。そのうえ、アンナの服装や態度も少しずつ変わりはじめ、「親密すぎるうちあけ話」は、次第に「親密な男女の関係」になりそうな雰囲気に……?

しかし、こんなアンナの言葉ってホント or ウソ？ またアンナがウィリアムに見せる態度は挑発？ 何らかの駆け引き……？ そんなウィリアムに対して、モニエ医師が授けたアドバイスはさすが精神分析医のプロ。それは、彼女に夫がいるという証拠は？ 彼女は虚言癖かも？ 彼女は最初から部屋をまちがえたフリをしたのかも……？ というものだった。女心の機微に疎い税理士のウィリアムは、こんな複雑な女心の奥に迫るアドバイスにきちんと対応できるの……？ こんな女との会話はホントに難しい……。

挑発的なセリフと想像力をかき立てる会話はエロティック……？

この映画にはアンナのヌード姿もなければ、きわどいお色気シーンも全く登場しない。しかしアンナの話によれば、アンナの運転ミスによって誤って夫を轢いてしまったため、足が不自由となった夫は性的不能となり（？）、以降アンナの体に触れなくなったとのこと。そして続けてアンナは、「私が愛人を持てば、彼の欲望も甦るはず」と言っていた。

さらに、ある日突然、ウィリアムの事務所を訪れた夫のマルクは、怒りを露にしながらも、ウィリアムに対して「妻を満足させてくれ」とまで……。この倒錯した性的会話こそ、まさにマルキ・ド・サドを生んだ国フランスの真骨頂……？ こんな挑発的なセリフと想像力をかき立てる会話だけで、スクリーン上にはエロティックな雰囲気がいっぱい漂いはじめることに……。

もし「弱い自分」がいたら……？

私が今年の流行語大賞に推薦したいのが、姉齒秀次元一級建築士による「弱い自分がいた」という国会発言。彼はお金欲しさに耐震強度偽装に手を染め、車や服装、装飾品が次第に贅沢になっていったようだが、自分の予想に反して（？）、親子二代で税理士をやることになったウィリアムはいたって生真面目そう。いつもきちんとした背広・ネクタイ姿だし、依頼人に対する態度も紳土的。もっとも、別れたはずの元妻（？）ジャンヌが、新しい恋人といい仲になっているのを知りながら、ちょっとしたアバンチュールもしていた（？）から、必ずしも唐変木ではなさそう……。

すると、もしウィリアム税理士の心の中にもいるはずの「弱い自分」が登場したら、ウィリアムとアンナの仲は一気に……？ ひょっとして、そんなスケベな想像をしてしまう、私が1番「弱い」のかも……？

さらにスリリングな展開に……

どうもアンナは夫のマルクに対して、「私には愛人がいる。その愛人は精神分析医だ」と話しているらしい。そして、その情事の有り様をマルクに語ることによって、少しずつマルクの関心を自分に向けているらしい……。しかし、そんな「デッチあげ話」に自分が使われるのは、本来ヤバイこと……。どんどんエスカレートしていくアンナの話聞きながら、ウィリアムのとまどいも次第に大きくなっていったが、他方、ウィリアムはそんな露骨な話をくり返していく中で、次第にアンナの表情が明るくなっていくことに、喜びプラスアルファの感情が広がっていくのを押し止めることができなかった。

そんな状況下、ある日マルクからかかってきた電話は、「窓のカーテンを開けて、前のホテルの部屋を見ろ」というケツタイなもの。その指示にしたがって、カーテンを開けたウィリアムが見たものは……？

ここからの2人の心理戦(?)の展開は、まるでサスペンス映画を観るようにスリリングなものだから、これ以上のネタばれは避けた方がいいだろう。大人の男と女の心理の動きと何とも微妙な感情のアヤを、存分に楽しみたいものだ。そして、結局この映画はどんな状態でラストを迎えることになるのだろうか……？ それは、この後のストーリー展開をじっくりと味わうとともに、あなたの目でしっかりと確認してもらいたいものだ。

2006(平成18)年6月17日記